

ハーベスト春期聖会

「現代のクリスチャンに必要な3つのレンズ (3)」
聖書的イスラエル論—イスラエルをどう理解するか—

はじめに

1. この説教を語る理由

- (1) 現代社会の混乱と不確実性
 - ①情報の氾濫
 - ②相対主義の拡大
 - ③偽情報（フェイクニュース）の害悪

- (2) クリスチャンが抱える問題
 - ①内向的信仰
 - ②主観的・心情的信仰
 - ③未信者との関係が断絶した信仰

- (3) 時代に流されないために必要なレンズが3つある。
 - ①「聖書的世界観—世界をどう見るか—」
 - ②「聖書的歴史観—歴史をどう読むか—」
 - ③「聖書的イスラエル論—イスラエルをどう理解するか—」

- (4) イスラエル論は、組織神学の「ミッシングリンク」である。
 - ①多くの教会がイスラエルの役割を無視、あるいは霊的に解釈している。
 - ②教会とイスラエルの関係の誤解が、混乱を招いている。

- (ILL) イスラエル大使の通訳をした体験
 - ①六日戦争（Six-Day War）の期間は1967年6月5日～6月10日。
 - ②駐日イスラエル大使：モシェ・バルトゥール（Moshe Bartur）氏
 - ③1966～1972年まで駐日イスラエル大使
 - ④大使は、エゼキエル書37章1～14節から語った。
 - ⑤救われる前に、聖書的世界観、歴史観、イスラエル論の片りんに触れた。
 - ⑥クリスチャンになってからも、イスラエル論が興味の中心にあった。
 - ⑦メシアニックジャーミーとの出会い
 - ⑧デイスペンセーションナリズムとの出会い

2. 置換神学とは何か

- (1) 教会がイスラエルに代わって神の民になったとする教え
 - ①紀元2世紀以降、教会教父の時代に芽生え、広がった。
 - ②その結果、神学的反ユダヤ主義と結びついた。
- (2) 聖書の比喩的解釈は、種々の問題を生んだ。
 - ①字義どおりの解釈の放棄
 - ②契約の一貫性の否定
 - ③終末論の混乱
 - ④ロマ11章に啓示された「イスラエル回復の預言」の否定

3. アウトライン

- (1) 契約の受け手
- (2) アブラハム契約の守り
- (3) 教会が受けた祝福
- (4) 終末的役割

結論：今日の信者への適用

I. 契約の受け手 (2ポイント)

1. 聖書の神は、約束に基づいて、人間との関係を築かれる。

- (1) 契約は、神の性質の信頼性と忠実さの現われ(民23:19、ヘブ13:8)。
 - ①神は、イスラエルを選び、明確な関係性の枠組みを示された。
 - ②アブラハム契約、シナイ契約、土地の契約、ダビデ契約、新しい契約
 - ③これにより、イスラエルは、神の御心を理解し、応答することができる。

2. 契約は、救済史の中心軸である。

- (1) イスラエルは、諸契約の受け手となった。
 - ①契約は、神がどのように人類を贖おうとしておられるかを理解する鍵。
 - ②神は、イスラエルを用いて人類救済計画を実行される。
 - ③神の御業は、気まぐれなものではなく、予測可能なものとなった。
 - ④契約は、終末と永遠に向けた希望を提供する。

II. アブラハム契約の守り (3ポイント)

1. イスラエルの選びの目的

- (1) 「救いのための選び」ではなく、「救いの方法としての選び」である。
 - ①神は、全人類を救うための器としてイスラエルの民を選ばれた。
 - ②神とイスラエルの関係の基本的枠組みとなるのが、アブラハム契約である。

- ③イスラエルに、土地、子孫、祝福が約束された。
- ④すべての民は、アブラハムとその子孫を通して救われる(創12:1~3)。

2. アブラハム契約の付帯条項:「祝福と呪いの法則」

(1) 創12:3a

Gen 12:3a わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。

- ①この聖句は、契約の民を敵の攻撃から守るための神の保証である。
- ②「神の国の外交政策」とも言える。
- ③アブラハム契約の付帯条項は、歴史哲学の基本法則である。
 - *歴史哲学とは、歴史を導く法則を探求する学問である。
- ④アブラハムとその子孫に対する態度が、その人(国)に跳ね返ってくる。

(2) 世俗的歴史家たちの歴史哲学

- ①イスラエルの「奇跡の生存」を、神抜きで説明しようとする。
- ②社会的、政治学的、経済的要因を列挙する。
- ③民族的アイデンティティ、教育水準、経済活動の柔軟性、反ユダヤ主義

3. 歴史的事例(国々の興亡)

(1) エジプト

- ①イスラエル人を苦しめたため、神の裁きを受けた。
- ②10の災いと出エジプトによって国力を失った(出1~12)。

(2) バビロン帝国

- ①イスラエルを捕囚にしたが、後にペルシアに滅ぼされた(ダニ5章)。
- ②神は、ご自身に敵対する勢力さえも用いることができる。

(3) ペルシア帝国

- ①ペルシアのキュロス王は、イスラエル人を故郷に帰還させた。
- ②「わたしは彼の右手を握り、」と称えられ(イザ45:1)、一時的に繁栄した。

(4) スペイン(1492年)

- ①ユダヤ人を追放した結果、国力が衰退し、大帝国から転落した。
- ②同年にアメリカ大陸を発見したが、そこはユダヤ人の逃れの場となった。
- ③乗組員(3隻合計で約90人)の中に改宗ユダヤ人が複数含まれていた。

(5) ドイツ(ナチス時代)

- ①ホロコーストによるユダヤ人迫害の後、第二次世界大戦に敗れた。
- ②国土が分断され、荒廃を経験した。

(6) イギリス

- ①バルフォア宣言(1917年)でユダヤ人国家樹立を支持した。
- ②三枚舌外交の結果、帝国の没落が加速した。
 - *アラブへの約束、フランスとの約束、ユダヤ人への約束

(7) アメリカ合衆国

- ①建国以来、ユダヤ人に比較的好意的だったため、世界最大の超大国に成長。
- ②イスラエル建国(1948年)を支持したため、戦後のリーダー国家となった。
- ③イスラエル支持を表明する時、国内の繁栄と平和が強まりやすい。
- ④イスラエルに敵対的な政策をとると、内部混乱や自然災害が増える。

(8) アラブ諸国(アブラハム合意後)

- ①UAE、バーレーン、モロッコ、スーダンなどがイスラエルと国交を正常化。
- ②これらの国々は経済協力、観光、技術交流を通して、利益を得ている。

(9) 日本

- ①杉原千畝(リトアニア・カウナスの日本領事代理)
- ②樋口季一郎(陸軍中將として1938年に満州に赴任)
- ③彼らの功績により、戦後世界における日本の評価が高まった。
- ④日本とイスラエルの経済交流は拡大しつつある。
 - *2023年の二国間貿易総額は約28億1,000万ドル。

III. 教会が受けた祝福(3ポイント)

1. 聖書

(1) ロマ3:2

Rom 3:2 あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました。

- ①神の啓示はイスラエルに与えられ、それが書き記され、教会に伝えられた。
- ②使徒たちと初代教会のリーダーたちは、すべてユダヤ人であった。
 - *ルカもユダヤ人であった(フルクテンバウム師)。

2. メシア(キリスト)

- (1)「女の子孫」は、ユダヤ人としてお生まれになった(マタ1章、ルカ2章)。

- ①メシアの系譜は、アブラハムとダビデに遡る。

3. アブラハム契約の霊的祝福

- (1) 神の救いの歴史は、イスラエルを通して展開する(創12:3)。

- ①アブラハム契約の霊的祝福は、キリストによって成就した。
- ②その祝福は、異邦人にも及んだ(ガラ3:14)。

Gal 3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。

- (2) ロマ 11:17~18

Rom 11:17 枝の中のいくつかが折られ、野生のオリーブであるあなたはその枝の間に接ぎ木され、そのオリーブの根から豊かな養分をともに受けているのなら、

Rom 11:18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。たとえ誇るとしても、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。

- ①異邦人信者は、オリーブの木に接ぎ木された野生種の枝である。
- ②異邦人信者は、ユダヤ人に対して誇ってはならない。

IV. 終末的役割 (5ポイント)

1. 教会時代 (現在)

- (1) 教会が福音宣教の中心であり、イスラエルは「かたくなな時代」にある。

- ①イスラエルは依然として、無条件契約の受け手である。
 - *アブラハム契約、土地の契約、ダビデ契約、新しい契約
- ②イスラエルは今も、神の真実性の証拠である。

- (2) 1948年のイスラエル国家誕生は、エゼ37章の「枯れ骨の谷」の預言の成就。

- ①肉体的回復(不信仰の中での回復)の部分が成就した。
- ②次に、霊的回復(悔い改めと救い)が成就する。
 - *個々のユダヤ人の救いは、初穂としての救いである。

- (3) 携挙が起こると、神の証人としての「教会」は地上に存在しなくなる。

- ①イスラエルに対する神の取り扱いが、再開される。
- ②イスラエルと反キリストの契約締結が70週目(ダニ9:27)の開始時点。

2. 患難期 (7年)

- (1) 144,000人のイスラエル人

- ①彼らは、神の証人として福音を宣べ伝え、多くの異邦人が救われる。

3. イスラエルの霊的回復

(1) 患難時代の後半、イスラエルがメシアを受け入れ、民族的回心が起こる。

①ゼカ 12:10

4. 再臨

(1) イスラエルの祈りに応えて、イエス・キリストが再臨される。

①キリストは、イスラエルを敵から救い、千年王国を設立される。

5. 千年王国

(1) イスラエルは、地上のメシア的王国の中心として、諸国を祝福する。

①かつての召命を回復し、「祭司の民」「祝福の器」として諸国の中心に立つ。

②イスラエルの祭司的役割と国家的使命は、千年王国で完成される。

結論：今日の信者への適用

1. 聖書的イスラエル論の復習

(1) イスラエルは、契約の受け手である。

(2) イスラエルは、アブラハム契約によって守られている。

(3) イスラエルは、教会に多くの祝福を与えた。

(4) イスラエルには、終末的役割がある。

2. 自問自答すべきテーマ

(1) イスラエル建国を、「時のしるし」として理解しているか。

①1948年の建国やユダヤ人の帰還は、エゼ 36~37章の部分的成就である。

②目を覚まし、福音の緊急性を再認識する。

(2) ロマ 11章の教えに従い、ユダヤ人の救いのために祈っているか。

①神の約束は、今も有効であり、最終的に民族的回心が起こる。

②神の選びに敬意を表し、反ユダヤ的な感情や置換神学的思想を避ける。

③患難期前の時代において、福音をユダヤ人に届ける使命を自覚する。

(3) 千年王国が成就するという希望を持っているか。

①「異邦人の時」は、やがて過ぎ去る。

②千年王国の中心はエルサレムであり、再臨のキリストがそこから統治する。

③神の義による支配を希求しつつ、今の時代において正義を追求する。

(4) 異邦人信者は「接ぎ木された枝」という自覚を持っているか。

①イスラエルを妬むことなく、感謝の心で、祈りをもって支える。

②イエス・キリストを伝えることが、最大の愛の行為である。